

# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員 (主査)

梶 茂樹



学位申請者 古閑恭子

論文名 アカン語アシャンティ方言の研究 —特に音韻を中心として—

アカン語 Akan は、ニジェール・コンゴ語族クワ語派に属する言語で、西アフリカ・ガーナの南部を主体に話されている。ガーナでは、国民 700 万人のうち約 40%がこれを母語として用い、また第 2 言語として話す人も多い。

アカン語は 9 つの下位方言区分がなされている。そのうち古閑氏が主として取り組んだのはアシャンティ方言 Ashante である。古閑氏は、これを現地フィールドワークを含め、約 6 年かけて調査してきた。本研究は、音韻部分を中心にするとはいえ、このアカン語研究の集大成として書かれたものである。

アカン語は、音韻論の分野では有名な言語である。特にイギリスのシュワートが、アカン語に見られる母音調和を、「舌根前方移動性」(ATR: Advanced Tongue Root)によって説明して以来、母音調和の研究では必ずと言っていいほど言及される言語となっている。また、その後もアメリカのシャクターやフロムキンやクレメンツ、またリンダウなどが理論的関心から研究しており、音韻論の理論的文献にしばしば登場する言語となっている。またアフリカでは比較的早く (ローマ字による) 正書法が確立された言語であり、一見、改めて調査する必要のない言語のように見える。

しかしながら、アカン語の母音調和は、細かく見ていくと複雑で、そこにはもともとの 10 母音体系 (すなわち i, e, a, o, u の 5 母音にそれぞれ ±ATR による対があり計 10 母音) から、その体系が崩れていく過程を現在示している。これに、方言間の違いや、正書法上の母音の区別の問題も絡んでくる。また、母音調和以外の分野においては、まだまだやるべきことは多い。

このような文脈をふまえて、古閑氏は、既に出版されている先行研究を検討しながら、母語話者を相手にしたインフォーマントワークによって研究を続けてきた。本研究は、まずインフォーマントワークによって得られた一次資料に基づく地道な研究である点を評価すべきであると考え。そして、その音声的記述は極めて精度の高いものである。とりわけ母音の細かい区別とダウンステップを含む声調の記述がそうである。

本論文(x+312 ページ)の構成は以下のようになっている。アカン語を取り巻く社会言語学的考察と語彙集も用意されていたが、あまりに大部になるため、ここでは割愛されている。

- 第 1 章 序論
- 第 2 章 アカン語の音韻と形態
- 第 3 章 アカン語の母音調和
- 第 4 章 アカン語の声調
- 第 5 章 アカン語の発話のリズム
- 第 6 章 結語

補遺1 物語 M'agyinamoā no afa he? (家のねこはどこに行ったの?)

補遺2 ことわざ

参考文献

まず第1章で、本論文の構成、並びにそれぞれの章における論点を述べたあと、第2章では、アカン語の構造の全体像を、特に音韻と形態の面から概観する。第3章以下で母音調和と声調に関する具体的な論考がなされる。本論文の主眼は、この母音調和と声調であり、以下、この2つを中心にみていく。

音声的には、アカン語には(1)の15の母音が現れる。そしてATRに関与しない鼻母音(1.b)を除くと、口母音は(2)のように±ATRによる2つの組に分かれる。通常、単語(あるいは語根)を構成する母音はどちらかの組のみのものである。ただ問題は、ɜとaが一部、相補分布をなし、一部なさないということである。ただ、分布が重複するのは、2単語のみであることから、基本的には、アカン語は9つの口母音音素と5つの鼻母音音素を持っていると言える。これは、低母音に関してはATRの区別はなくなりやすいという一般的傾向と一致している。その場合、一般にはaが現れるというのも音声学の原理に一致している。またe, oについてもɜと似たような分布上の制限があることを古閑氏は、丹念な調査により明らかにする。これも通時的観点からは、現在e, oがi, uと合流しつつあることが原因で、ATRによる区別がなくなりつつあることを示している。アカン語のアクアペム方言 Akuapem などを含む多くのクワ系言語では、(3.b)のような体系へ移行しつつあるのに対して、アカン語アシャンティ方言では(3.a)のような体系へと移行しつつあることが示される。なお古閑氏はATR素性を音声学者リンダウに従って「咽頭腔拡張」Expandedとしている(舌根の前方移動のみならず喉頭の下降により咽頭腔全体が拡張していることが関与的と見るため)。

- |        |                        |                        |
|--------|------------------------|------------------------|
| (1)    | a. 口母音                 | b. 鼻母音                 |
|        | i                    u | ĩ                    ã |
|        | ɪ                    ʊ | ĩ                    õ |
|        | e                    o | ã                      |
|        | ɛ                    ɔ |                        |
|        | ɜ                      |                        |
|        | a                      |                        |
| (2)    | a +ATR (+Expanded)     | b. -ATR (-Expanded)    |
|        | i                    u | ɪ                    ʊ |
|        | e                    o | ɛ                    ɔ |
|        | ɜ                      | a                      |
| (3) a. | アカン語アシャンティ方言 (移行形)     | b. 多くのクワ系言語の母音体系       |
|        | i                    u | i                    u |
|        | ɪ                    ʊ | e                    o |
|        | ɛ                    ɔ | ɛ                    ɔ |
|        | a                      | a                      |

名詞は通常、接頭辞-語幹-接尾辞という形態論的構造を有し、接頭辞にも接尾辞にも語幹の母音の影響、すなわち母音調和が及んでくる。それに対し、一見似たような構造をしている動詞の変化形においては、その主語マーカである接頭辞が母音調和を起こさないことがあることを古閑氏は指摘する。古閑氏は、「語(根)頭母音がi, e, u, ɔ, aあるいはe, oである場合、後接語母音は変化せず、語(根)頭母音がi, uの場合にのみ

後接語母音は i, e, u, o になる」(p.102)と書いている。これは主語マーカーなど接頭辞は、通常、*mi-tú* 'I shoot', *mi-pe* 'I like', *mi-dí* 'I eat' などのように語根母音との間に±ATR による母音調和を起こすのに、語根の母音が e, o の場合のみ *mi-pejá* 'I pick up' のように母音調和が起らないということである。これは、先に述べたアカン語アシャンティ方言では e, o がそれぞれ i, u に移行しつつある、あるいはほぼ完全に移行し、e, o の持つ+ATR (+Expanded)性が薄れているからであろう。とすれば、主語マーカーには母音調和が働かないから、それは接辞(prefix)ではなく接語(clitic)であるという指摘は根拠が薄くなる可能性がある。

アカン語の子音は p, b, t, d, c, j, c<sup>w</sup>, j<sup>w</sup>, k, g, k<sup>w</sup>, m, n, ɲ, ɲ<sup>w</sup>, f, (v), s, ç<sup>w</sup>, h, ɾ, (l), j, w でこのうち v と l は英語からの借用語に現れるものである。

音節構造に関して古閑氏は、1. V *akó* 'S/he goes', 2. CV *kó* 'to go', 3. N *n.sá* 'hand', 4. VN *an.ka.á* 'orange', 5. CVS *nóm* 'to drink' の 5 種類であるとするが、第 5 のタイプは少し不透明である。この場合、鳴音(S: Sonorant)に音節性はないが、後に *abáw* 'He hits him' および *brám* 'Come in!' の場合のように、w, m が成節性を持っている例が出てくる。これらの場合は、w, m のあとにもともと高母音が続いていたのが脱落したもので、本来は母音を書きしておくべきであろう。

音節構造に関するもう 1 つの問題点は、*dokónú* < \**dokún* 'kind of dumpling' のような場合である。最後の高高と現れる 2 音節を、声調の分析からあたかも 1 音節であるかのように扱っている。確かに、もともとは語末の母音はなかったようであるが、それを根拠にこれを 1 音節だというのは無理がある。

アカン語の基本声調は高(H: High)と低(L: Low)そしてダウンステップ高(!H: Downstepped H)である。また数は少ないが下降調(F: Falling)が現れる場合がある。声調の機能としては、単語を区別する語彙的なもののみならず、時制の区別や所有構文を表す場合など文法的なものがある。

声調の分析は、母音調和の分析とともに本論文を構成する主要テーマであり、詳細に行われる。名詞に関しては、接頭辞、接尾辞、そして語根(語幹)の音節数毎に細かく検討が行われ、接頭辞、接尾辞は固有の声調を持たず、接頭辞の声調が高い場合は、その高声調は語根(語幹)の声調が左に延びてきたものだと分析される。そして語根(語幹)の声調は音節あるいはモーラ毎にその声調が指定されるのではなく、L, H, LH, HL, LHL, HLH, H!H, LH!H の 8 つのパターン(トーンメロディー)があり、これが語全体に実現されるとする。ただこれだけパターンが多いと、パターンで分析する意味があまりなくなるのではないかという意見もある。また下降調を伴う *májkó* 'prawn' のような例は 1 例のみであり、これは H!H の *na'na'* 'grandchild' や *jún!só* 'urine' などと同等に分析する可能性が審査委員より指摘された。

アカン語の声調の機能の 1 つの特徴として所有構文が声調で表されるということがある。例えば *kofi múlma'* 'Kofi's forehead' のような表現である。ここには所有関係を表すものは声調しかない (cf. *kofi* 'Kofi', *muma'* 'forehead')。これを古閑氏は、ヘッド名詞頭に統語的 H が挿入され、その H が単語頭につき、元々の L と次の H との間でダウンステップが生じると見る。一部の所有構文を、単語の持つ分節素なしの H (いわゆる floating tone) の存在によって分析するという研究は以前にもあったが、古閑氏のようにすべての名詞の声調パターンについてその変化を統語的 H の挿入により説明するのは初めての試みである。

動詞の活用形は 15 と数が多く、その声調は、用いられる要素の違いによって異なるという非常に複雑な様相を呈する。しかし古閑氏は、その 1 つ 1 つの変化形を丹念に追い、個々の活用形は、動詞構造を構成する各形態素の声調と各活用形が持つ文法的声調をベースに、声調規則が加わって実現されると分析する。

アカン語の発話のリズムに関しては、自然発話は、聴覚的に等時性を持つ複数音節の

まとまりによって構成されること、そしてこの等時性は主として母音のセグメント長の調整によってなされることを、物語と諺の例を用いて明らかにする。なお、このまとまりに古閑氏はフット(foot)という用語をあてるが、フットというには長すぎる嫌いがある(5音節や6音節の場合もあり)、リズム段落ぐらゐの用語が適当ではないかと思われる。なお、アカン語のリズムの研究としては、これが世界初のものである。

本論文は、インフォーマントワークによる著者の一次資料に基づきつつも、その考察は、たんに共時的なものにとどまらず、方言間相互の比較に基づく通時的な側面にも及び、また機械を使った実験音声学的手法を用いるなど、音韻論、音声学のほぼ全体に及んでいる。またその記述の範囲も、音韻論を中心にしつつアカン語の全体の及んでおり、1つの言語の研究の集大成と言える。そしてその表記は極めて精緻なもので、アカン語研究においては、スチュワートやクレメンツなどによる先行研究に伍して、これから参照され続けるものであると思われる。

審査委員からの意見としては、用いる用語体系や品詞の全体像、名詞接頭辞、接尾辞の役割、単語とフットの関係などについてさらに詳しい説明を求めるものや、すでに一部述べたような、与えられたデータに関して別の解釈を示すものもあつたが、これらは、古閑論文の価値を減じるものではない。

以上を、総合して、本論文は博士(学術)の学位を与えるにふさわしいものであると審査委員全員が一致した。